

## 木曜定例ミーティング

H25.10.30 (木)

### 【議題】子どもたちと接するにあたり、私たち大人に必要な感性とは

子どもたちは十人十色、まさにいろんな個性があります。体や精神面の発達段階も、個人によって様々です。さらに、抱えた事情もその子その子によって異なります。当クラブへ通う子どもたち一人ひとりをサポートするために、私たちにはどのような感性が必要なのでしょう。

### 【論点】詩「子は親の鏡」から学ぶべきこと

「子は親の鏡」という詩があります。今回はこれを基に、みんなで話し合いました。

#### 詩「子は親の鏡」が創られた当時の背景

この詩は1954年作成。作者は、ドロシー・ロー・ノルト（アメリカ人）さんです。

ドロシーさんのその当時の家族構成は、夫、娘（12歳）、息子（9歳）の4人家族。

ドロシーさんのその当時の職業は、保育園主任をしながら、「家庭生活と子育て」についての講演活動を行っていました。

ちなみに、1950年代のアメリカ教育論は「子供を厳しく叱るのが親の役目」でした。

そんな中で、詩「子は親の鏡」は創られました。

#### 詩「子は親の鏡」が世界に広まった経緯

- ・アメリカ中の産婦人科にて配布。何百万人というお母さん、お父さんに読まれてきた。
- ・10ヶ国語に翻訳され、世界中で出版。
- ・世界中の幼稚園、子育て教室、学校教員セミナー、教会等で使用。
- ・日本では「アメリカ・インディアンの教え」と誤解されて出版。

#### 作者ドロシーさんからのメッセージ

わたしがこの詩で伝えたいことは、とてもシンプルです。子どもは常に、親から学んでいるということです。子どもは、いつも親の姿を見ている。ああしなさい、こうしなさいという親のしつけの言葉よりも、親のありのままの姿のほうを、子どもはよく覚えていきます。親は、子どもにとって、人生で最初に出会う、最も影響力のある「手本」なのです。子どもは、毎日の生活のなかでの親の姿や生き方から、よいことも悪いこともすべて吸収してしまいます。口で何かを教え込もうとしてもダメなのです。親がどんなふうに喜怒哀楽を表すか、どんなふうに人と接しているか。その親の姿が、手本とし

て、子どもに生涯影響力を持ち続けることになるのです。

子どもは、みんな個性豊かです。自分で何かを創り出し、自分でものを考える力を持っています。親としての真の喜びは、その子の個性を伸ばし、生き生きとした毎日を送ることができるように見守ることではないでしょうか。

子どもは大切な家族の一員です。子どもは、自由で発想豊かです。そんな子どもの心を知れば、わたしたち親もまた、子どもと共に成長し、学ぶことができます。家族の絆を深めることができるのです。

子どもは、本当に日々親から学んでいます。そして、大人になったとき、それを人生の糧として生きてゆくのです。

#### 学校教師ジャック・キャンフィールドさんからの推薦メッセージ

ジャック・キャンフィールド：小学校教師、子育て教室講師  
『心のチキンスープ』『母の心のチキンスープ』の著者  
そして、ドロシーさん夫妻のたいへん親しい友人

詩「子は親の鏡」を読むと、よい配偶者、よい教師、よい上司になるためにはどうしたらよいのか、そんな知恵も学ぶことができるでしょう。愛情と思いやりで満ちた豊かな人間関係を築くためにはどうしたらよいのか、そのルールを実行したら、暴力や争いは避けられ、職場での摩擦も少なくなり、学校教育はより充実するに違いありません。犯罪や貧困や薬物に関する問題も減ることでしょう。このような社会問題は家庭から始まるものなのです。わたしたちがよい親となることが、結局は、現在直面している大きな社会問題の解決につながるようになるのです。

あなたは、きっとそのままで十分によい親御さんだと思います。でも、詩「子は親の鏡」を読むうちに、今以上によい親になれると気づかれ、微笑まれるに違いありません。明るくて積極的で我慢強い子、素直でやさしくて頑張り屋の子、親切で正直で公平で誰からも好かれる子 わが子をそんな子どもに育てることができるのです。こんな子どもたちが大人になった世界を想像してみてください。それは夢ではありません。ドロシーもそう信じています。わたしたちが人を育てる仕事を続けてゆくことができるのは、そう信じていることができるからなのです。

親という仕事は尊い仕事です。わたしたち親は、わが子のためだけではなく、すべての人間のために、よりよい未来を築かなくてはなりません。詩「子は親の鏡」を読んで、あなたは、子育てで最も大切なことは何かを学ぶことができます。どんなに時間がかかったとしても、わたしたちの意識が変われば、この世界は必ずよくなるはずなのです。

では、次ページにて、詩「子は親の鏡」を紹介します。ご覧下さい。

## 子は親の鏡

ドロシー・ロー・ノルト

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる  
とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる  
不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる  
「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる  
子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる  
親が他人をうらやんでばかりいると、子どもも人をうらやむようになる  
叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる  
広い心で接すれば、キレる子にはならない  
誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ  
愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ  
認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる  
見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる  
分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ  
親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る  
子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ  
やさしく、思いやりを持って育てれば、子どもはやさしい子に育つ  
守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、  
子どもは、この世の中はいいところだと思えるようになる

## ミーティング内容

- (A) 詩が創られた背景を知り、その詩に込められた思いを知り、実際にその詩を読んだ感想はいかがですか!?
- (B) 涙が止まりません。
- (A) その涙の意味は、なんですか!?
- (B) 私のジュニアスクールに、ある子供がいます。その子は、学校での集団行動になかなかついていけないということでした。その子のお母さんが私に、その話をしてくれたときの、最後に言った言葉を急に思い出しました。
- (C) そのお母さんは、その時、何て言ったのですか!?
- (B) 「この子を深く愛したい」と言いました。
- (D) 親御さんの愛情って、本当に深いですね…。
- (A) 私も娘がいます。子育ては本当に大変ですが、「子を育てる」という本質的なところは、はずしたくありませんね。
- (C) 本質的なところって、どんなところですか!?
- (A) 日々の忙しさ、子育てのプレッシャー、子が幼い場合はその小さな子どもと一日中向き合うことでのストレスなどを、どの親も抱えています。言っても聞かないときは、誰でも怒りたくなります。しかし、片側では「育てる」ために「怒る」行為は適切なものか、疑問を感じます。
- (D) 子どもたちには、正しさ、優しさ、強さ、誠実さなどなど、いろんな素晴らしい感性を身につけて欲しいですね。では、それらを身につけさせる手段として「叱る」とか「怒る」行為は、本当に必要なのでしょうか。
- (B) 大人になると忘れてしまいがちですが、子どもは「子どもの世界」で生きています。いろいろ経験してきた大人から見ると「良くない行動」や「失敗しそうな行動」に見えますが、子どもはまだ未経験。いろんなことすべて、やってみなくちゃわからないと思います。やってみて、良かったのか、良くなかったのかを初めて自分の心で判断できると思います。
- (C) 大人の世界へ子どもを引き上げようとする 것도、場合によっては必要なのかもしれません。しかし、まずやるべきは、私たち大人こそが「子供の世界」へ降り立ち、そこで子供たちの目線へ歩み寄る努力が必要でしょうね。
- (A) 子育てや教育に、近道も遠回りもないと思います。その子にとっては、そのすべての経験が必要だったと思える日がやがて来ると思うからです。私は「今のままでいい。今のあなたの、そのままがいい」と言ってあげられる心の余裕を持ちたいです。
- (B) 子どもたちに「よい行動」をとって欲しいと思うのなら、言葉でそれを伝えるのではなく、私たち大人が「よい行動」を実践していけばいいのですね。これは、難しい場面もあるかもしれませんが、自分を律し、魅力的で楽しそうな良い大人になれるように頑張りたいですね!

## まとめ

結局、「正しい子育て方法」とは存在しないということなのでしょう。

「子どもには、こういう言葉かけをしなさい」とか、「子どもがこうなったら、こうしなさい」などというノウハウは、表面上の解決策であり、本質的解決策ではないのでしょう。

私たち大人にできる本当の教育方法とは、ズバリ！

「私たち自身が行動で示す」です！

そして、最も大切なことは、

「子どもを信じること」です！

誰にでも、自分の心の中に「善の気持ち」が存在しています。特に難しい状況の時こそ、その善の気持ちを感じとり、それに素直にしたがって行動することで、それを見つめていく子どもたちに自然に伝わっていくんだな...と感じました。それで、十分なんだなと思いました。そして、それこそが「教育する」という意味になるんだなと、みんなで再認識しました。

さてさて。

私たちコーチはこれからもコートの中で、子どもたちと一緒にはじけようと思います。子どもたち一人ひとりが「自分」をさらけ出せる空間づくりのためにも、私たち大人がはじけてしまえ！と思いました。

最後にドロシーさん、このような気づきの機会をどうもありがとうございます。ドロシーさんと一緒に、私たちも世界平和を祈ります。